11月号

ステパノだより

No.237

今月の聖句

『友のために自分の命を捨てること、
これ以上に大きな愛はない。』

ヨハネによる福音書　第15章13節

◎11月の予定

1日(金) 秋の遠足（小・中）
修学旅行(小・中) 10／30～
5日(火)・6日(水) 内部進学者願書受付
6日(水)～8日(金)
転入体験学習②（小）
7日(木) 聖書教室
14日(木) 授業参観・保護者会
校内研修会
16日(土) 関東地区私立小学校教員研修会(洗足)
17日(日) 陸上記録会（中）
21日(木) 収穫感謝礼拝・教務委員会
22日(金)・23日(土) 内部進学者入学考査
26日(火)～28日(木) 期末試験（中）
28日(木) ニコニコランチ
教職員協議会
30日(土) 学校説明会③
ヤオマサカップ大磯（小）

◎12月の予定

2日(月) むかえようクリスマス
12日(木) クリスマス礼拝
教務委員会
13日(金) 子どもたちの祝会
14日(土) クリスマス祝会

運動会

今年は予備日14日（月）の開催、さらに途中から雨模様となってしまい、気合をいれて練習してきた紅白対抗リレーは実施できませんでしたが、**元気!やる気!!本気!!!**の本番でした

◎今月の行事から

○授業参観・保護者会　14日（木）

小学校は、1・2校時が授業参観で3校時が保護者会。中学校は、1～3校時が授業参観、4校時に保護者会を行います。子ども達の日頃の学習の様子をご参観いただきます。保護者会では、子ども達のより良い成長について共に考えたいと思います。

○収穫感謝礼拝　21日（木）

たくさんの産物を実らせ、私達を養って下さる神様に感謝の礼拝をお献げします。
お時間の都合が付く方は、是非おいでください。各ご家庭からご提供いただいた野菜や果物は、礼拝後に地域の富士白苑さんに寄付をさせていただいています。

○ニコニコランチ　28日（木）

小中全校を縦割りにしてグループを作り、普段はあまり関わることがない児童、生徒、教員が食事をしながら交流できる楽しい行事の一つです。

隣人

学園長　小川正夫

天皇即位礼正殿の儀、饗宴の儀には、世界の多くの国から来賓がお見えになり、国際親善の中にも国の力を感じました。儀式のしきたりや、装いの姿に平安時代を彷彿とさせる厳粛で優雅な佇まいを自然に感じました。

天皇皇后両陛下に各国から来日した来賓が祝賀の挨拶をされていましたが、なかでも中国を代表する方が、即位の礼の後に記者の質問に答えて、「中国と日本には伝統や文化には数多く共通するところがありますが、中国ではすでに失われてしまった事柄があります。日本には伝統として大切に残されているのは素晴らしいと思います」と感想を述べていたのが印象的でした。

考えてみれば、私達が日常なんの違和感もなく使っている漢字、多くの日本人が用いる名前も漢字を使っています。それは中国から学んだ文字ですし、聖徳太子は日本の国を統一する礎に仏教をおいたことも、中国から学んだということは日本の歴史で明らかです。「即位の礼は平安絵巻の優雅さと品格を感じる」という声がたくさんありましたが、確かに千二百年もの間伝統として大切に受け継がれ守られている歴史は注目に値します。

前任校で高学年を担任していた頃、修学旅行の引率で、社会科日本史の纏め学習ということもあり、歴史の都、奈良、京都の名所を訪ね、子ども達と一緒に、何度か比叡山延暦寺の根本中堂で板の間に正座をして説法を聞いたことがあります。私語が聞こえたり、正座の姿勢を崩したりすると、厳しい喝が飛んできて緊張感がありました。

案内されてみると、そこには最澄（さいちょう）が最初に灯したという法灯の明かりがあり、千二百年もの間、燈明を絶やしたことがないという「不滅の法灯」がありました。油断してはいけないという言葉がここから生まれたと聞いたことがあります。

最澄は平安時代の人で、中国にわたり仏教を学び、日本に帰国、比叡山の延暦寺の根本中堂で天台宗の教えを広めた開祖といわれていますが、天台宗ばかりでなく、仏教を学ぼうとする修行者は宗派にこだわることなく受け入れ、今日まで仏教の教えを求める多くの修行者の道場にもなっています。

最澄の教えで心に残る言葉があります。それは「もうこりた」ですが、つらいことや苦しいことが続き「もう懲りた」ではなく、「忘己利他」つまり「自分のことは忘れ、人のために尽くすことができることにこそ幸せがある」という精神で、今日でも変わっていません。私はこの言葉が好きです。

同じく平安時代の人ですが、中国にわたり仏教を学び、日本に帰ってから高野山奥の院で真言宗の開祖となって教えを広めた人に空海と呼ばれていた高僧がいます。

空海は寺で教えを説くだけでなく、日本の各地を布教して歩き仏教を広めました。亡くなり高野山に祀られても、空海は生きている尊師として崇められ、毎日、朝夕二回御廟に食事を運びお供えするしきたりを千二百年前から今日まで続けているそうです。

最澄の教えと同じように、空海の教えで、心に残る言葉があります。

「人は誰でも胸の中に宝石になる石をもっている。一生懸命努力して磨いていると、やがてその石は光り輝く宝石になる」で、これもまた私の好きな言葉です。

勿論、仏教はここに紹介したような簡単なものではありませんし、奥行が深く、和宗、法相宗、華厳宗，律宗、天台宗、浄土宗，融通念佛宗、浄土臨済宗、曹洞宗、日蓮宗、真宗大谷派というように仏教は日本各地に広まっていきましたが、千年にわたって日本人の多くが影響を受けてきた仏教の教えは、中国から学んだと考えてよいでしょう。

半世紀も前になりますが、韓国ソウルに一週間ほど滞在し、民族博物館を訪ねた時、日本の平安時代を連想するものが多く、韓国から学ぶことがたくさんありました。国と国の間には国境が敷かれ体制も違い、価値観も異なることもありますが、拘りや先入観は偏見を生みやすく、判断が偏ります。自分の国ファースト、自分の国こそ正義という意識は正しい判断を誤ります。

聖書は、隣人を愛しなさいと私達に教えています。中国や韓国は隣人なのです。

６月号に引き続き、清水・山口両先生に、リレー原稿をお願いしました。テーマは、「子どもの心に寄り添った声かけ」です。

特性を大切に

養護教諭　清水　花葉

学校とは、様々な人がおり、様々な人と深く関わることのできる場所です。このような場所は、他になかなかないのではないでしょうか。

現在聖ステパノ学園には、児童８１名、生徒５８名の合計１３９名が在籍しています。元気いっぱいな子、静かに過ごすことが好きな子、不安になりやすい子、目立ちたがり屋な子、怒りっぽい子、他人の目線が気になる子、穏やかな子。このような児童、生徒を見ていて思うのは、一人ひとり違っていて、みんないいなということです。子どもたちには聖ステパノ学園での学校生活の中で、様々な人と様々な関わりを持ち、その中で自分らしさを発見してほしいと思います。

そして私は、日々の子どもに対する指導の中で、一人ひとりの特性を尊重するということを大切にしています。それは、一見マイナスに思われるような特性に対しても同じように尊重するようにしています。

例えば、思ったことをストレートに口に出して友達を傷つけてしまった子どもに対して。引っ込み思案で挨拶などが自分からできない子どもに対して。興味を持ったものにすぐ触れてしまいトラブルとなってしまう子どもに対して。癇癪を起こすと人や物にあたってしまう子どもに対して。それらの良くない行動についてはもちろん厳しく指導をすることもありますが、良くない行動を引き起こした子どもの特性については否定せず、「それはあなたらしさ。でも、こうした方が良くなるんじゃないかな。」という内容の声掛けをするようにしています。どのような特性もその人らしさを表すかけがえのないものです。それらを尊重しつつ、子どもたち一人ひとりがよりよく生きていけるような手助けをしたいと日々考えています。

会話のコツ

スクールカウンセラー　山口　滋美

我が家のもうすぐ４歳になる孫は、「第一次反抗期」の真っただ中。口だけは達者になって、先日も理屈にならない理屈をこねて大騒ぎ。「どうして車に乗るんだよー。乗りたくなかったのにー。車なんてぶっ壊してやるー。」思わず、「でも、仕方ないでしょ！」と大きな声で言い返したくなりました。

そのとき、思い出したのが、「ＢＵＴではなくＡＮＤで」という言葉でした。子どもが癇癪をおこした時に、「でも」「でも」と話を受けていると、ますます癇癪はひどくなり、収集がつかなくなるとのこと。反対に、多少話のつじつまが合わなくても、「そして」と受けて話をつないでいくと、子どもの気持ちが落ち着いてくるらしいのです。

そこで、私も実験をしてみることにしました。「車に乗ってるよね。そして、嫌なんだね。」「乗りたくないよね。そして、次はおうちに帰るよ。」などなど。文脈は変だけど、なんとか「そして」でつなごうと頭をフル回転。しばらくすると、孫のトゲトゲした声が、「うん」「うん」と柔らかくなってきたのが、運転している私の背中越しにも感じられました。そして「あれ、声がしなくなったな。」と思ったら、すやすやと穏やかな顔で寝ていました。

偶然かと思い、次には兄弟げんかをしてヘソを曲げている小学生の孫にも試してみました。今度もうまくいきました。

大人でも「そして～だよね。」と受けてくれる人には気持ちよく話すことができるけれど、「でも」「でも」と合いの手を入れられると、話す気持ちが萎えてしまうということは経験済みかと思います。

高学年や思春期の子ども、第二次反抗期まっただ中の子どもにも、うまくいくか分かりませんが、試してみる価値はあるのではないでしょうか。

授業のユニバーサルデザイン

ＵＤＬ
教諭　米原　佑樹

クラスの子どもたち、一人ひとりに合った授業をするにはどうすればいいか。日々頭を悩ませるテーマですが、これを追求する研究の一つにユニバーサルデザイン教育（ＵＤＬ）というものがあります。ユニバーサルデザインとはそもそも、建物や商品設計の用語で、言語・障害の有無・能力・右利きか左利きかなどの違いを問わず、だれもが使えるものを目指すデザインのことを指しますが、このユニバーサルデザインの理念を教育に応用にしたのが、このＵＤＬです。

ＵＤＬでは、授業を「Ｗｈａｔ」「Ｈｏｗ」「Ｗｈｙ」の三つの観点で捉えています。①何を学ぶのか ②どのように学ぶのか ③なぜ学ぶのか。これらの答えを、教師が「これを学びなさい」「このやり方でやりなさい」「これを目指して勉強しなさい」と一辺倒に示すのではなく、子どもに合ったものを用意したり、選択肢を提案したり、子どもと一緒に考えたりしていくことが、だれもが参加できる授業につながっていくということです。

さて、①何を学ぶのか ②どのように学ぶのか ③なぜ学ぶのか。この中で、一番大切なことはなんでしょう。もちろんどれも重要であることは間違いないのですが、実際に授業準備をしていると、不思議と①と②に比重が傾いていきます。みんなが参加できる授業をするためには、その二つを充実させなくてはいけないことが明らかだからです。また、少し教師目線の本音を言ってしまえば、「何をどのように教えるか」ということは具体的で準備がしやすいですし、なぜかそこに教師の技量が現れるような気がしてしまっているところも正直あるのです。しかし、子ども目線では、どうなのでしょうか。

ＵＤＬでは、もちろん３つともすべて大切だということを前提に、特に③「なぜ学ぶのか」に重きをおいています。学びの目標や動機を、子どもたち一人ひとりが意識できている。だからこそ、子ども達は自分に合った勉強を選んだり考えたりすることができるのだ。それが、それぞれに合わせた授業を作るスタートになる、と考えているからです。

たしかに「これならわかりやすいだろう！」と一生懸命に用意した教材も、子どもたちの食いつきが弱く、結局大した授業にならなかったなんてことは、日々の授業ではままあることなのです。逆に子どもたちがモチベーションを高く持ってくれた時には、自ら学習を進めはじめ、こちらが準備した以上の教育効果を発揮し始める時もあります。

先日、運動会の直後の授業で、中３の生徒たちに「運動会の作文を英語で書いてみようか」と提案しました。「えー！無理だ！」という反応がほとんどでしたが、この運動会は彼らが最高学年として臨んだ最後の運動会。当然そこにかけていた彼らの想いは強く、いざ書き始めると文句を言っていた子たちもすぐに集中しはじめ、自ら表現辞典を引いたり周りに質問をしたりと、それぞれやり方を工夫しながらあっという間に見事な作文を書き上げてしまいました。「あれ、思ったよりも書けたな」という呟きには思わず笑ってしまいましたが、想像以上の力を発揮した彼らを心から頼もしく思うと同時に、改めて学びのモチベーションの持つエネルギーに気付かされました。

子どもたち一人ひとりに合った授業。子どもたちが一人ひとり、「なぜこれを勉強するのか」の答えを持てている授業。残念ながら、まだまだそうはいかないことばかりで毎日反省の連続です。それでも、子どもたちが主体的・能動的に授業に臨めるよう、そしてその時、こちらからもそれぞれに合った教材と学習手段を提案できるよう、これからも子どもたちと一緒に励んでいこうと思います。

みんなでひとつ

教諭　草山　広子

聖ステパノ学園の大きな行事の一つである運動会が終わりました。後半雨に降られましたが、精一杯頑張った子ども達は笑顔の一日となりました。低学年の参加賞は、「折り紙」でした。

私は、小学二年生の担任をしています。クラスでは、「折り紙」が丁度ブームになりつつあるところでした。難しい折り方をきわめている子、お気に入りの折り紙作品がある子、折り方をマスターしたくて、友だちに教わっている子など様々です。そこで、この興味や関心を国語の授業に結びつけられたらと考えました。

一学期に学習した説明文「つばめのすだち」では、【順序を確かめながら読もう】、二学期の「夏休みの思い出」では、【順序が分かるように話そう】という「めあて」があります。そこで、復習を兼ねて、順序を表す言葉を使って、自分の折り紙作品を説明するという授業を考えました。授業の最後は、一年生を招待して実際に折り紙を折って作ってもらうというものです。

まず、折り紙作品を一つ選び、作ってみます。次に、ワークシートに作り方を書きます。すると、『こういう風に折りたいのだけれど、どう書いたら良いのかな』と思考している姿、また何度も元の形に戻して折り返しながら、取り組む姿が見られました。最後に折り紙作品を写真に撮ってワークシートに貼り、オリジナル説明書の出来上がりです。

約束の日、一年生がやって来ました。自分のコーナーに来てくれるように、一生懸命宣伝をしていました。司会・進行・案内も分担してみんなでひとつのものが出来ました。授業の挨拶をして、笑顔で帰る一年生を「ありがとう」の言葉で見送る二年生でした。

ユニバールデザインを意識した学習教材の利用

教諭　西海　多恵子

中学校の国語科では、どの学年も、教科書準拠の「学習漢字ノート」という、ワークブックを利用しています。単元ごとの新出漢字の習得を中心的な目的とした、書き込み式のノートです。一週間に一度提出をして、確認のためのミニテストを行っています。ＵＤＬの基となる、いわゆるユニバーサルデザインの原則のうち、①どんな人でも公平に使えること、②使う上での柔軟性があること、③使い方が簡単で自明であること、④必要な情報がすぐわかること、の四点を、このノートの使い方に応用し、生徒が使い方を選択して学習しています。

見開きページの冒頭（右ページの上部）には、新出漢字の読み方と、筆順の情報があり、筆順の色分け付きで練習スペースが三字分あります。右ページの下半分は、読みの学習。新出漢字を使った熟語が例文の中に示され、その読み方を答える形式です。左のページは、書きの学習。右ページと同じ熟語がカタカナやひらがなで書かれているので、自分で漢字に直して書く形です。また、応用問題として、字形の似ている漢字の問題や同音異義語、同訓異字の問題などもあります。

冒頭の三字分の練習は必ず行う約束になっています。後は、読みだけをやってくる人、応用問題はパスする人など、それぞれです。自分で○つけをして間違いを直し、学校での確認テストに備えようと声をかけています。提出されたこのノートを見せてもらうと、使い方は色々ですが、その人なりに力に応じて努力している様子がよくわかります。

確認テストもノートに付いている物を使いますが、読み書きの苦手な人には、答えを選択する方式の物もこちらで作って、選べるようにしています。

これならできる、と自分で学習の仕方を考えながら学ぶ小さなステップが、意欲の増進や自信につながってほしいと思います。

【小学校】十月十四日（月）は運動会でした。元気！やる気!!本気!!!のエネルギーがみなぎっていました。

うんどうかいをしました。ぼくは、せんばつにえらばれました。ままとおばあちゃんがきてうれしかったです。（小一　ＯＴ）

うんどうかいをしました。ままとじいじとばあばが、つなひきとアンダーザシーをみてくれたことがたのしかったです。ぼくはしろぐみでした。ぎんのトロフィーをとりました。うれしかったです。（小一　ＳＲ）

今日は運動会でした。まずは徒競走、ぼくはゴールしたら４位でした。つぎは大玉ころがしです。ぼくはアンカーでした。まきかえそうとしました。しかし、おしくもまけてしまいました。くやしかったです。あともうちょっとというところでした。そしてせんばつリレーです。せんばつリレーは赤黄青でした。そしてつな引きです。二戦とも勝ちました。つぎはすずわりです。すずわりは負けてしまいました。おかたづけ競争も負けてしまいました。みんなで踊ろうは「パプリカ」でした。えんぎもフラダンスをやりました。（小三　ＳＰ）

今日は運動会本番です。小学生の徒競走です。わたしと四人がならびます。「あ～きんちょうしてきた」。そして、とうとう「位置について、よーいどん」。わたしは自分の力いっぱい走りました。七位になりました。七位になるのって本当にいいことだなあと思いました。

つぎの出番は８の字とびです。一回戦は六十二回とびました。二回戦は六十九回跳びました。もう感動しすぎてうれしすぎでした。

大玉運びでは、どちらもゆずらない戦いでしたが、赤組がまたまた勝利でした。でも、つなひきで負けてしまいました。それから雨が降りはじめました。でも、また再開しました。ごはんを食べて次は演技です。失敗しなくて良かったです。また、雨が降ってきました。「でも応援合戦だけでもやろう」と先生が言いました。そして、結果発表。赤の勝利でした。かっこよかったです。（小五　ＨＭ）

十月十七日に「なるほど！体験出前教室」がありました。テーマは、「深い海にすむ不思議な生きものについてのお話」でした。小一から小四の四十七名が参加しました。

講師は佐藤孝子先生：（法）海洋研究開発機構　地球情報基盤センター
授業終了後、著書を寄贈していただきました。

【中学校】今年は雨の運動会でした。プログラムのすべてを行うことは出来ませんでしたが、集中力を切らすことなく、競技に、係の仕事に、全力を尽くした生徒たちです。

応援団への気持ち

応援合戦の練習は運動会の一週間前から始まった。私は去年も応援団に入っていたけれど、去年とは全然ちがった。何がちがったかというと、まずは団長さんが厳しかった。もう一つは一拍子から三拍子が、同じつき方をするだけでなく、二つ以上のつき方をするようになったということである。人一倍、動きを覚えるスピードが遅い私は、一つひとつの動きを覚えるのに時間がかかった。特に三拍子は先輩に教えてもらっても、なかなか動きを覚えることができず、練習の時は、途中まで団長さんの動きをまねしながらやっていた。でも、まねをしているうちにだんだん覚えることができた。

しかし、すばやく動くのも苦手な私には、もう一つの問題点があった。それは、私が動きを覚えた頃にはみんなが動きを覚え、上手にまた素早くできるようになっていたので、動きを覚えてもみんなに追いつけないということである。しかも追いつけなくなると、あせってしまい、覚えていることもわからなくなってしまうことも少なくなかった。

そして、上手にできるようにならないまま迎えた運動会は、雨だった。応援合戦はなんとかやることができた。少し寒かったが、雨を気にせず、その時に出せる力を出し切った。

ところが、私たち白組は赤組に負けてしまった。私も残念に感じたが、昼休みの時に、「運動会は負けてしまっても応援合戦だけは勝とう。」と言っていた団長さんは、私の十倍どころか百倍ぐらい残念だと感じたと思う。私の何十倍も団長さんは努力していたからこそ、私より悔しく感じているはずだ。だから私も、三年生になったら、そう思えるぐらいがんばろうと思った。

（中一　ＡＮ）

赤組団長

私はこの運動会で、とても大切な事を学びました。それは、「人を頼る」という事。

私は団長という事もあり、赤組をまとめていかなければいけなくて、それは一人では絶対に無理なことでした。最初は、何事も全て一人でやらなければならないと思い、とても悩んでいました。

そんな時、同じ組の後輩、中三の皆、副団長に支えられ、運動会の準備が進んでいきました。

運動会に向けての本格的な練習が始まったのは、一週間前。この短い一週間の中で色々なことを考えて、決めて。私一人ではできなかった事が、いっしょに考える人が一人や二人増えるだけで、こんなに違うんだと思いました。私は赤組の皆に感謝の気持ちでいっぱいです。後輩や中三の皆にはもちろん、副団長には、感謝してもしきれないです。

赤組の皆、ほんとうにありがとう。

（中三　ＦＪ）

白組団長

今年、私は団長をやりました。正直、最初はすごく不安でした。どうしたら勝てるかとか、皆をどうやってまとめればいいのか全然分からなかったけど、周りの皆が助けてくれて、すごく嬉しかったです。

本番の応援、私は今までで一番良かったと思う！結果は負けてしまったけれど、私は後悔していないです。型を決められなくて、皆を困らせたりしたのにしっかり聞いてくれたし、私が一日休んだけど、その後も直す所をしっかり直してくれたから、いい物が見せられたと思います。

だから、皆も後悔しないで、中二から下の人は、来年に活かしてくれればいいなと思います。

宮田、急に副団長をお願いしたのに、一緒に練習の内容を決めたり、陰でいっぱい支えてくれたり、心強かったよ。そして、中三の皆、一人ひとりが意識してやってくれているのがすごく伝わりました。いろいろ迷惑かけてごめん。

私は、この白組で皆とできて本当に良かったです。ありがとう。皆お疲れさま。

そしてＪ、小一からずっと一緒にいて、最後の運動会でＪと団長ができて良かった！ありがとう。

（中三　ＳＮ）

中学校国語科の西海多恵子先生。陸上部やハンドベル部の顧問もされています。お話を伺ってきました。

◇どうして国語の先生に？

読むのが好きなんです。特に古典のリズムやひびき、雰囲気に惹かれます。父も教員で、いい仕事だよと聞いて育ちました。

◇ステパノに来た頃の話を聞かせてください。

奉職したのは一九九一年。その頃が一番大変でした。生徒達はやんちゃさんばかりで、クラスは全然まとまらなくて。生徒はストレートにぶつかってくるから、自分の弱い所もみっともない所も、全部ありったけをさらけ出さないと向き合えないって思いました。反省はたくさんしたけど、不思議と辞めたいとは思わなかったですね。子ども達や、ここでの生活が魅力的でしたから。

◇通学生も入学するようになりました。

ぶつかって本音でかかわる方法が絶対いいと思っていたけれど、それだけでは通用しないことも増え、転換を求められた時期でした。今、目の前にいる子ども達が心落ち着いて楽しく学校生活を過ごせ、卒業しても喜びを持って毎日を生きるにはどうしたいいのか、教員みんなで考え始めました。

◇先生ご自身は変わりましたか

変えられましたね。以前は教育ママだったと思いますよ。息子と娘がいますが、いいものを与え、能力を伸ばすことを考えていました。でも人の本当の価値は、有名校に行くことや芸術などの才能があることじゃないと、理屈じゃなく教えられました。お金とか外聞とかは何の意味もない。人の気持ちが理解できて、元気で生きていてくれる、それが一番尊いことだとわかったんです。

◇洗礼を受けたのは？

五〇歳近くなってからです。ステパノで大事だと気付かされたこととキリスト教の教えが一緒だったんです。自分は小さいということを教えてくれる神様に全部を任せられて、すごく楽になりました。

◇ストレスはありませんか？

ないですね。小さな愚痴はあるけど、不満は何もないです。生きる場所を与えていただいて、すごく幸せです。時間があれば、飼っている犬を眺めたり、畑で野菜を育てたりします。薪ストーブを去年買ったんですよ。自然や古い物、灯りが好きです。

◇ステパノが目指す姿をひとことで

卒業しても『自分の学校』って誇りに思い、帰って来られる学校であってほしいです。

帰って来ます、先生。

先生と出会えた子ども達、そして私たちも幸せです。

STEPHEN'S NEWS

○泳力検定 6級 小五 MA 5級 小五 NR

○日本漢字能力検定 合格者

10級 小一 MR 小二 HN 小四 MA

小五 OY **満点合格** 小二 SH、SZ

9級 小三 CR、HR 小四 YY 8級 小三 SP

小四 TH 小五 MA 小六 IN、FH 中一 YS

7級 小三 IN 小四 IH 小五 OT、SH、

TY、YD 中一 NH、MK 中二 IM

6級 小五 KR 小六 AK 中一 AT、KM、

TM 5級 小六 KH 中一 KK、ME 中三 SA

4級 小六 KF 中一 AN 中三 IM

3級 中二 UM、OR 中三 NS

準2級 中一 KS

○第12回神奈川県小学校陸上競技交流大会

四年男子 100m 18秒73 TR

五年男子 800m 3分01秒74 KS

六年男子 100m 15秒93 OS

五年女子 100m 17秒08 AM

五年女子 100m 17秒84 HM

六年女子 800m 2分47秒41 FH

【編集後記】

秋の遠足、修学旅行からスタートする十一月。さまざまな活動の体験から、それぞれが大きな「力」を蓄える季節が来たことを感じます。（さ）

代表者　学園長　小川　正夫
発行者　聖ステパノ学園小学校・中学校
ステパノだより編集委員会
〒255-0003　神奈川県中郡大磯町大磯868
TEL　0463-61-1298
FAX　0463-61-9739
http://www.stephen-oiso.ed.jp
二〇一九年十一月七日（木）発行　第237号